GSDY 2010 Summer AMA Report

GROUNDSCAPE DESIGN youth

2010 SUMMER 海士町見学会報告書

GROUNDSCAPE DESIGN youth とは？

GROUNDSCAPE DESIGN youth（略称 GSDy, http://www.groundscape.jp/youth/ ）は、グランドスケープデザイン会議（略称 GS デザイン会議，http://www.groundscape.jp/ ）の若手デザイナー育成プログラムの一環として、2006 年 4 月に発足しました。近年のまちづくりやトータルな空間づくりにおいて、空間を形づくる諸分野間の理解と連携は必要不可欠であります。
しかし、現代の学術的連携の枠組みにおいてそれは未だ困難な状況にあり、これを担う自発的なネットワークの形成が必要であるという考えから、本団体は発足しました。本団体では、土木／建築／都市計画／ ID ／歴史／造園などの諸分野から学生／若手社会人など 100 名以上が活動しています。主な活動として、学生／若手デザイナー間のネットワーク形成と協同の場の提供を目的とした、ワークショップや見学会、シンポジウムなどの主催、運営を行っています。

CONTENTS

1 Overview・・・・・・・・・2 企画概要
2 Members・・・・・・・・・3 参加者一覧
3 Tour Report・・・・・・・ 4 活動報告
4 Essay・・・・・・・・・・・・12 見学会感想
5 Financial Report・・・34 会計報告

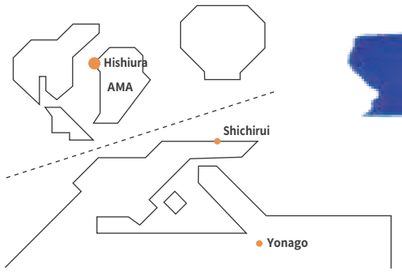
1. Overview

● 企画名：GSDy2010 夏　海士町見学会

● 開催日時：2010 年 8 月 21 日 (土)~22 日 (日)

● 参加人数：16 名

● 開催場所：島根県隠岐郡海士町



● 講師：
山崎　亮さん（studio-L 代表）
西上　ありささん（studio-L）
山内　道雄さん（海士町長）
松前　一孝さん（海士町教育委員会　地域共育課　課長）
下野　裕さん（環境チーム）
鎮竹林のみなさま（産業チーム）
I ターンの若者のみなさま

● 企画趣旨：
2010 年 4 月、「地方におけるデザインとは？」というテーマのシンポジウムが開かれ、パネリストである studio-L の山崎さんが、ご自身の手掛けた島根県海士町の総合振興計画についてお話し下さいました。海士町では、『島の幸福論〜海士ならではの笑顔の追求〜』という独自のテーマを掲げ、積極的なまちづくりを展開しているというのです。このお話を伺い、「実際に海士町を訪れたい！」という強い思いが、わたしたちの中で込み上げてきました。
今回の見学会では、多様なまちづくりのひとつのあり方として高く評価されている海士町を見学し、まちづくりに対し主体的に取り組まれている住民の方々と交流することによって、海士ならではの笑顔は一体どこから生まれて来るものなのか、探ってまいりました。

● プログラム：
・山崎さんが携わってこられた総合振興計画の住民参加プログラムに参加されたチームや関係者の方々との交流会
・役場の方々との交流会
・海士町へ移住された若者の方々との交流会

安藤　達也
東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻 景観研究室
飯沼　伸二郎
早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻 景観・デザイン研究室
石川　真衣
千葉大学大学院園芸学研究科　庭園デザイン研究室
大谷　友香
東京工業大学大学院 総合理工学研究科 人間環境システム専攻元結研究室
岡田　裕司
早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻 景観・デザイン研究室
加藤　俊介
東京工業大学大学院　社会理工学研究科　社会工学専攻　中井研究室
喜多　峻平
芝浦工業大学 工学部　土木工学科　交通計画研究室
佐多　祐一
東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻 景観研究室
並木　義和
早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻 景観・デザイン研究室
福角　朋香
東京大学大学院
古川　日出雄
早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻 景観・デザイン研究室
増子　泰亮
早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻 景観・デザイン研究室
八木　亮輔
UR 都市機構
山田　敬太
慶応義塾大学 SFC 研究所
● 上ノ薗　正人
フリー
● 松宮　かおる
立命館大学大学院 理工学研究科 創造理工学専攻 都市空間デザイン研究室

※順不同。●印は見学会企画担当者。

2. Members

3. Tour Report

1st Day 2010.8.21 sat ①

米子駅に集合。かばの前で記念撮影。（写真１）

バスで七類港まで移動。

菱浦港に向け、七類港を出航。(写真 2,3)

片道約 3 時間の船旅。交流会に向け資料を読んだり、海を眺めたり , ごはんを食べたり。(写真 4~8)

菱浦港に到着。今回の講師である山崎さん、西上さんと合流。(写真 9~12)

交流施設で海士町のまちづくりと総合新興計画「島の幸福論」の説明

視察趣旨説明（見学会担当）

海士町へ見学に訪れることになった経緯、参加者の出身地紹介などをしました。(写真 13)

海士町のまちづくりについて（松前課長さん）

まずは役場職員の意識改革からはじめた海士町。交流促進、地産地商、産業創出などを進めています。AMA ワゴンを活用した、島の子供たちと都市の学生との交流などおもしろい取り組みも行っています。(写真 14)

質問タイム＆町長さんのお話

自身が先頭に立って改革を進めるという強い意志の元、まずは自ら減給を行い、職員の意識改革、さらには町民の意識改革にまで波及させていった町長さん。強いリーダーシップと職員の団結力の強さがまちを変えていきました。(写真 15)

海士町は時代の最先端（山崎さん）

2030 年にはほぼ全ての都道府県が人口減少すると予測されている現在、既に人口減少を迎え、それに対するまちづくりを着々と進めている海士町は、時代の最先端をいっているとのこと。

住民のまちづくりへの参加について（西上さん）

第 3 次総合振興計画（キンニャモニャの変）では、ハードの部分のものづくりは進んだものの、住民の参加は十分ではありませんでした。第 4 次総合振興計画では、計画の策定段階から住民がまちづくりに参加し、実行段階においても結局的な住民の協力が得られました。(写真 16,17) また参加者は海士町総合振興計画「島の幸福論」、別冊「海士町をつくる 24 の提案」をいただきました。(写真 18~20)

終了

1st Day 2010.8.21 sat ②

会場を片付けた後、草の生い茂った山道をのぼり、竹炭工房へ (写真 1,2)

産業チーム「鎮竹林」の活動説明と竹細工体験

ちんちくりんのみなさんは、人の管理が行き届かず荒れてしまった竹林を再生させようと、間伐した竹で竹炭や竹細工をつくり活用しているそうです。(写真 3)

竹細工チーム、テントチーム、竹割りチームに分かれ、作業。

「メンバー全員分の竹箸を完成させなければ、夕食の海鮮 BBQ は素手で食べることになる！」

というプレッシャーの中、竹細工チームは黙々と作業をつづけます。(写真 4~7)

テントチームは山に入り、汗だくになりながらテントの骨組みとなる竹を伐採。余った時間で竹のトングもつくりました。(写真 8~10)

竹割りチームは専用の道具を使い、竹を縦に割って行きました。水分が残っている竹はなかなか割れないらしく、最初はみんな苦労していましたが、最後のほうは慣れた手つきでどんどん割ることができるようになりました。(写真 11~13)

後片付けの後、宿泊施設「隠岐自然村」まで送っていただく。(写真 14)

宿に到着

夕食（海鮮 BBQ）(写真 15~17)

山崎さん、西上さん、松前課長、I ターンの若者たちと、海士町のおいしい海の幸をいただきながら、交流を深めました。

竹細工でつくったお箸やトングも大活躍。

BBQ 後、集合して写真撮影 (写真 18)

懇親会

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

2nd Day 2010.8.22 sun ①

各自朝のお散歩。山の上からはいい景色が。ただ朝からもう暑い！(写真 1,2)

みんなそろって朝ごはん。出発までのんびり。(写真 3)

宿の前で集合写真 (写真 4)

この写真は宿の入り口の掲示板に掲載してもらえるそうです。メンバー全員にポストカードもいただきました。

海遊びチーム、まちあるきチーム、ちんちくりんチームに分かれて行動。

海遊びチームは海にダイブ！

無人島まで泳いだ後、その場で採れた生ガキやウニをご馳走になりました。これ以上ないくらいに新鮮な海の幸は、格別のおいしさでした。

他にもあわびやサザエも採れるなど、海士の海にはおいしいものがいっぱい。(写真 5~8)

まちあるきチームは十数戸程度の世帯で構成される集落を探索。

住民の方ともお話することができ、島での生活を垣間見ることができました。

その中で、「集落の人みんなが顔見知り、留守の時に鍵をしめない」という、都会ではまず信じられないような海士町の習慣を実感することができました。(写真 9~14)

その後、両岸を海で挟まれた灯台のある岬へ。海士の美しい海が一望できました。

移動中には隠岐牛も発見！？(写真 15~17)

ちんちくりんチーム（といっても 1 人だけ）は 1 日目に引き続き、竹テントの製作をお手伝いしました。

1 人で参加したことにより、より島の方と深い交流ができたようです。(写真 18)

キンニャモニャセンター船渡来流亭にて昼食

カキフライや新鮮なお刺身をいただきました。海士の塩で食べるお刺身はおいしい！(写真 19,20)

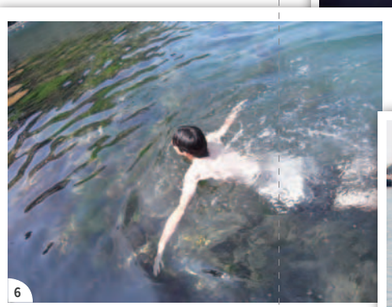
各自休憩＆おみやげタイム

1

2

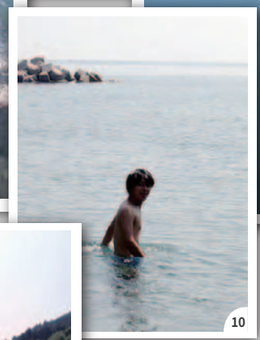
3

5


6

7

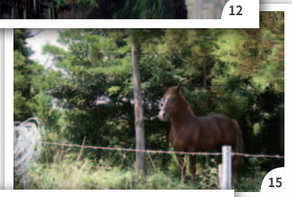
8


10

11

12

9


15

14

13

16

17

18

20

19

2nd Day 2010.8.22 sun ②

総合振興計画環境チームの活動説明（下野さん）

下野さんはこれまで長らく建設業のお仕事をされており、工事を行う上でやむを得ず海士の自然を壊さざるを得ないという苦しい立場でしたが、それから一転、自ら環境を整備する会社を企業し、現在はＩターンの若者たちの力も借りて、環境に対する取り組みとなれば何でも行っています。(写真 1~3)

参加者の感想発表

参加メンバーの見学会に対する感想は様々でしたが、全員が共通して感じたのは、海士町に住む方々が自らの生活をおもいっきり楽しんでおり、また私たちのようなよそ者をあたたかく迎えいれてくれるホスピタリティにあふれているということです。受け入れる海士町側が、Ｉターンなどで島を訪れたよそ者に対して、永住を決して強要しないため、プレッシャーを感じることなく、のびのびと暮らすことができるのではないかという意見もありました。(写真 4,5)

山崎さんを囲んで

船の到着を待つ間、山崎さんを囲んでお話を伺いました。現在の社会に対して、大きな船に乗っていては自分の思うことができないというのであれば、自ら小さな船をつくり、漕ぎ出しましょう。荒波に負けず進んで行けば、小さな船の仲間が集まり、大きなこともできるかもしれません。(写真 6)

七類港に向け、菱浦港出港

西上さんの発案で、紙テープのお見送りをしていただきました。山崎さん、西上さんの他に、松前課長さんやＩターンの方々、宿でお世話になった方がかけつけてくださいました。その上地元の少年たちも加わり、島の方々と船上のわたしたちとが、幾本もの紙テープでつながった瞬間、この島のあたたかさを全身で感じることができました。テープが切れた後も、お互いの姿が見えなくなるまでずっと手を振り続けました。(写真 7~11)
帰りは片道約 2 時間の船旅。旅の思い出を語り合ったり、疲れて寝る人も。(写真 12~14)

米子駅にて解散。行きと同じくかばの前で最後の集合写真。

あれ？ 1 人足りないぞ。海士町に 1 人忘れてきたみたい。(写真 15)

15

1

2

4

3

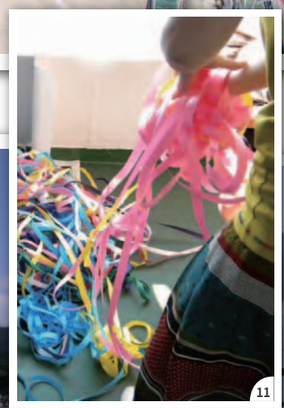
5

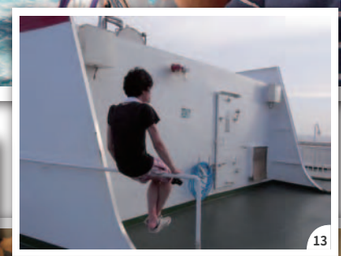
7

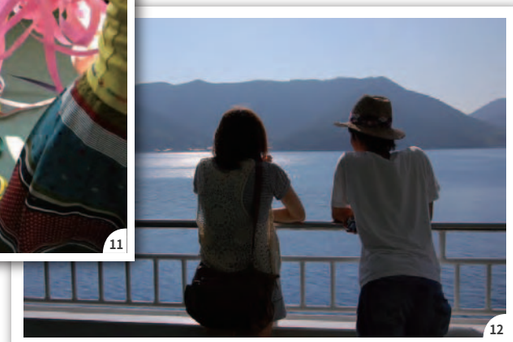
6

8

9


11


13


12

14

10

4. Essay from Participant

安藤 達也

吸い込まれるほど青く澄んだ海に、緑の山並みが複雑に重なり合う島々。
フェリーで海風に吹かれながら、やっぱり島はいいよな、って思う。

そんな感じで始まった海士の見学会。島の風景にどうしても目を奪われた。
島にこんなに広々と田園風景が広がっているのが驚きだった。水が豊富な島ならではなのだろうか。視点をうまく取ると隣の西ノ島の山並みも陸続きのように見えて、こんな借景もあるんだと思った。島にいるのに島じゃないような奥行きを感じる。また、島だから畑を荒らす動物もおらず、田畑の周りは柵もなくすっきりとしているのだそうだ。

海士の独自の取り組みや、島の先進性は前からある程度は聞いていたが、あらためてそのすごさを実感した。町長の話を伺っていると、民間企業並みに経営を厳しくする一方で、自由な発想を求める部署にはとても寛容にあたるメリハリを持った町政をはじめた手腕によるところが大きいのかな、と思った。
I ターンの人にも自由にやらせている。I ターン者にもずっと海士に住むことを求めない町長の姿勢はすごいと思う。過度のプレッシャーをかけないことが逆に良い結果になっている。
風通しのいい島、人々がのびやかに自分らしさを発揮している島、そんな印象を持った。

島の人たちも積極的に事業をおこす姿勢がある。島の方針として公共事業をやめようということになったときに、建設会社は臨機応変に畜産業に転じ、うまくいっている。I ターンの人たちも一次産業に従事するだけでなく、新たな産業を日々興している。活動的な人たちが多く集まっているから、さらに輪が広まって、次々と新しい人材が流入する好循環が続いている。

＊　＊　＊

虹色のテープが海に舞ったあと、僕は民謡の練習を見学しにいった。隠岐出身の民謡の先生が島の伝統的な踊りを教えている。キンニャモニャ祭りはしゃもじで踊るわけだが、他にも皿を持ったり、米とぎの道具を使った踊りがあったり、とても多彩な踊りがある。どれも台所で調達できるものなのだそうだ。またこの民謡の先生はとにかく粋という言葉がぴったりな、アクティブな方だった。

翌日は、観光センターで自転車を借りて、しばらく島をめぐる。まずは隠岐神社へ。後鳥羽上皇が配流されていたところだそうで、かつてはお寺があった。その後、江戸後期まではそのお寺は残っていたのだが、明治の廃仏毀釈によって、そのお寺は失われ、今は小さな池と礎石がその面影を残している。神社は昭和に再建されたものだそうだ。

かつては島流しの島として、上皇までもが配流されてきたこの島に、今は都会からこぞって I ターンの人が押しかけるのも何かの因果なのだろうか。
町長さんもおっしゃっていたが、いわく、この町は古くから人を暖かく迎え入れる気質があると。後鳥羽上皇を迎え入れたのもそう。I ターンの人たちもそう。島の目線から見れば、話は一貫しているのかもしれない。

午後から西ノ島へ。摩天涯と呼ばれる景勝地がある。ここからの風景は本当に感動した。スケールが大きい。日本海の孤島らしさを感じた。断崖絶壁のそそり立つ頂付近は牧草地が広がっており、牛がのんびりと草をはんでいる。このギャップが何とも言えずにいい。
やはりこの風景に比べたら海士にはなかなかこれほどの雄大な景色は見られないかもしれない。だから、海士では人材を育てて、人のつながりの島を目指したんだ、という話もあるのだそうだ。

夕暮れは夕日を見に小高い丘へ登った。島前の 3 島が見渡せる場所。3 島に囲まれた内水面はどこまでも穏やかに茜色に染まっていく。海士はもちろん今うま行っているが、3 島 3 町村との連携がうまくできたらもっと大きなことを動きになるな、とふと思った。内水面で 3 島共同で何かイベントでも行えたら、とてもおもしろいし、島前ならではの強みになる。

夜は、とあるスナックへ行き I ターンの方や地元の方を含めて、ここでは色々な人に出会った。地元の人たちはどこの何ちゃんがどうしたとか、あそこの誰さんがこうしたとか、いろいろな人たちの話をしていた。島中がとにかく一つの大きな家みたいな感じなのだろうか。ウワサはこう言うところで広まっていくんだな、と思う一方、でもそれはとても明るい家族のような感じも思った。

話は変わるが、U- ターンや J- ターンはともかくとして、I- ターンってターンじゃないのになんでターンって言うんだろう。と考えて、しばらく地方に出てまた都会に戻ってもいいのかな。
都会の人にとっての U- ターンもあっても良いのかも。海士に行って何かを学んでまたどこかでそれが役に立てれば。町長さんもそういうことをおっしゃっていたわけだし。とにかく、魅力的な人が多く、何かを学べる可能性が大きい島なんであったと思う。

さらに翌朝、早朝に起きて島を一周し、その後海士をあとにした。
短い時間で島を見て回って、海士の人はみんな優しかった、美しい島だった、というのはたやすいが、そういう結論はやめにしたい。ただ、出会った人はみんなそれぞれ魅力的で、自分なりのしっかりした考えを抱えていて、互いに互いを尊重する心意気を持つ方たちだった。
そんな人たちが集まる総体として、海士があるんだと思う。

＊　＊　＊

今回、講師として海士を案内して下さった山崎さん、西上さん、海士町でお世話になったみなさま、どうもありがとうございました。また、ぜひ海士に行きたいと思っています。

また、今回の見学会を企画してくれた松宮さん、上ノ薗くん、お疲れさまでした。建物を見学する会も悪くないですが、人とのふれあいを感じられる見学会が GSDy でこれからも続くといいなと思っています。

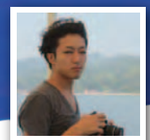
石川　真衣

海士で食べたウニの味が忘れられずにいる。

海水の程よい塩分と、濃厚な甘さ、そしてわずかに感じるほろ苦さ。身はしっかりと詰まっているのに、口に運んだ途端にとろける食感。男は胃袋をつかめ、とは昔からよく聞くが、私の心はもうすっかり海士の虜だ。海の幸はもちろんのこと、雑味のない米や、そこから作られる上級な美酒、どこか懐かしく美しい風景、そして暖かく人なつこい人々のおかげで、本土からやってきたよそ者は、言葉通り骨抜きになってしまった。

島の時間はゆるやかに流れ、清流はせらせらと水田の間を下る。風に揺れる稲穂の群れと、幾重にも重なる遠くの島の山々の景色が、今でも目に焼き付いている。海士に広がる棚田には、ギラギラと光るイノシシ除けがほとんどない。田畑を荒らす動物が本土から渡ってきておらず、過剰に防ぐ必要がないのだという。「日本中を探しても、もうこの景色はなかなか見れないと思う。」ぽつりと呟いた山崎さんの表情は、どこか寂しげだった。豊かな海と、山と、穏やかな集落。海士はまるで日本の縮図のようで、もうどこにもない景色を残している場所なのかもしれない。

今回の見学会では i ターンの若者何人かと接する機会を得たが、「旅人」から「住人」へ変わるキッカケは、多くの場合、ほんのささいな事らしい。では逆に、再び「旅人」へ戻るときはどんな変化が彼らの中でおこるのか。失望か、燃え付きか、あるいは新たな野望を燃やして新天地にいくのか。もしまた機会があるならば、ぜひ聞いてみたい。そう思った。



飯沼　伸二郎

今までまちづくりの成功事例といわれる現地を訪れると、少しがっかりすることが多かった。
それは、雑誌や本には良い側面のみを強調して伝えるため、頭の中で理想のイメージができてしまい、そのイメージとのギャップがあるからだ。

しかし、今回の海士町にはそんな柔な予想は裏切られた。
想い描いていたイメージよりむしろ上を行っていたのだ。それは初めての体験だった。

特に印象に残ったのは“人”である。
出会った人が皆、とても前向きで志を高く持っている。そんな前へ進むエネルギーを行政職員、住民、I ターン者が共有し、うまく刺激し合って高め合い、それらが島全体に充満している。アツい人たちが住むアツい島。そんなプラスのエネルギーに包まれている島に、また新しい I ターン者が増えてくる。

本来、海士町の少子高齢化のスピードは早く、状況は数字のみでみるとかなり深刻である。
高校生の数も減り、各地区で配られる月刊の冊子には、毎月多くの老人の訃報が伝えられている。高齢化率は約 40 パーセント。

しかし、彼らは下を向かない。県外から高校生を連れてくる。皆ができる所から着実にまちづくりを行なっている。
皆で一致団結して、大きな課題に対して、“楽しく”立ち向かっている。
また行ってみたい、友達や家族を連れてきたい、と素直に思える島だった。

他の自治体に比べ、いち早く人口減少のすすむ、縮小社会の最先端をいく島、海士町。
わずか数千人という規模の島であり、今回のまちづくりの事例はかなり特殊かもしれない。
しかし、そこには２０世紀の価値観とは全く異なる、日本が目指すべき新しい“幸せのかたち”がある。
それはどこか新しいようで、昔からそばにありつづけたもののような気がする。

上ノ薗　正人

海士ではわずか 1 泊のみの滞在とはいえ、たくさんのことを考えるきっかけができました。
印象に残っていたのは、i ターンの方の話で、ひとくちに i ターンといっても、来た理由は様々であるということで、誰もがまちづくりで有名になった海士に来たというわけではないということを知りました。そして当たり前のことですが、そうしてやってきた人すべてが島の生活になじめたわけではないということを知りました。
海士だけでみるとこのことは少しさびしい話かもしれませんが、範囲を拡げて考えてみると、別のまちでそのような人々に住みやすいまちが見つかればいいわけで、日本全国の様々なまちが、各々の特色をアピールして、興味をもった人にまず来てもらえればいいのかなと感じました。そしてそれは普通にやろうとすると、当然ですが元々資源が豊富だったり交通の便利がよかったりするところに人が集まるに決まっています。そこでまちづくりのプロが入っていって、そのまちにしかない価値を見つけてもらったりまちの人と新しく育てたりしていく、地道なことですが、大事なこと。きれいごとではありますが、人々がこうしていろんな場所に誇りを持って暮らすことができることが、日本という島の幸福につながっていくのではないかなと思いました。

岡田　裕司

見学会の事の発端は、4 月の GSDy シンポジウム『地方におけるデザインとは？』、その懇親会で『海士町いこ！』という声が次々と参加者からあがったことにさかのぼる。

ある意味では今回はこのシンポジウムのスピンオフ企画とも言え、『地方におけるデザインとは？』の問いかけの答えを探しに言ったとも言える。

何か有名な建築を見るわけでも土木構造物を見るわけでもランドスケープを見るわけでもなかった。
今回の見学会では、海士町で行われている一連のまちづくり、そこに関わる人々、その一連のプロセスのデザインを見たと言える。

完璧な答えが見つかる訳もなく、そもそもそんなものなんて無いのかもしれないが、海士町の人々に触れ、直に話を聞き、また一歩その答えに近づけた様に思う。

実はこの夏休み、studio-L で半月インターンをしていたが、この海士町で過ごした 2 日間で学んだ事は、この半月と比べても同じ位、濃い内容だったように思う。

上野村もそうだが、ある企画が次の企画へ発展する。企画や議論が連鎖していく、すごく面白い流れが生まれている様に思う。

この連鎖を、更なる連鎖へ。
海士町と GSDy が今後もなんらかのかたちでつながっていけたらなと思う。

最後に改めて、見学会担当二人、studio-L の講師のお二方、海士町の皆様に感謝を述べたいと思います。
ありがとうございました。

大谷　友香

ある街によそ者が入るということ。よそ者だらけの都会では何の疑問も感じないが､海士町のような離島ではどう受け止められているのか。それが知りたかった。

以前、LETTER PREMIUM 2009 Spring 内の、過疎、限界集落問題のコラムで以下のようにコメントしたことがある。
『私の地元は過疎ではありませんが、お年寄りも増えてきていて今後どうなるのかなと心配な部分があるのは確かです。でも縁もゆかりもないどっかの学者だか都市計画家だかが突然やってきて、「私がこの地域をなんとかしてあげる」「守ってあげる」「支えてあげる」って言ってきても、どこか表面的で、偽善者にしか見えないのです。私には。だったら自分の地元くらい自分で守るよ、そんな都会人のエゴなんて要らないよ、と思うのです。』

もともとそんなことを考えていたため、4 月のシンポジウムは衝撃だった。

実際に海士町を訪ね、ふと気がついたことがある。禁止事項がほとんどない。○○してはいけません、のような看板も声もなかったし、誰かのやりたいことに対しダメだということもなかった。都市部では、法や条例を整備して住民の行動を制限する傾向がある。海士町ではそれがない。この町の規模だからかもしれないが、それが新鮮で、魅力的だった。
現地には 2 日間しか滞在できなかったため、まだ上っ面しか見ていないのかもしれない。しかし、また行きたいと思わせてくれる島だった。

帰りのフェリーの中で、冒頭の疑問を反芻していた。町長や松前課長をはじめとする住民の懐の深さや行動力、子供たちも参加する政策の提案、studio-L のお 2 人や I ターンの皆さんが楽しそうに仕事をされている姿など、おそらく裏には葛藤などもあるのだろうが、それさえも活力にしているようだった。

さて、私はどんなアクションを起こそうか。私がこれまで大学などで学んできた建築学は所詮座学で、現実を見ていない。もちろん蔑ろには出来ないが、時代の変化に伴って学ぶべき内容も変化すべきである。つまり､社会の現実を見ること。これが私の最初の 1 歩。

最後ではあるが、今回の見学会ではとても多くの方にお世話になった。この場を借りてお礼申し上げたい。また、今回の見学会では多くの後輩たちが参加してくれた。これも GSDy の成長の証である。社会人の参加者からも多くのものを得た。とても有意義であった。これからの活動にも期待している。

加藤　俊介

＜果たして自分は I ターンできるのか？＞
僕は就職の際に本気で I ターンを考えていたので（外的要因にて断念。。。）海士町への I ターン者が多い理由について関心があった。今までも中山間地域に何度か訪れたことがあったがそれらの地域と比べて、海士町なら I ターンしてもいいかもしれないと思えた。I ターンの動機が「その地域を何とかしたい」という使命感だけではつぶれてしまう。受け入れる側が I ターン者の幸福を持続できなければならないだろう。そのためには若い人が楽しく暮らせる仲間（年齢も近く、共感できる立場の人）がいることや、打ち込める刺激的な何かがあることが必要だと自分は思う。

＜鎮竹林での里山再生＞
２日目の午前中の自由時間も僕は鎮竹林（竹炭焼きなどを行い、里山を資源として有効活用するクラブ）に１人参加。加藤は協調性がないと思われたくないので弁解しておくと、スギダラケクラブや上野村見学会を通して里山や国産材に興味があるから選んだ。
鎮竹林の人には「I ターンってどうですか？」といった質問はしなかった。それは住民の人と仲良くするためには「研究者的」な姿勢を見せては受け入れてもらえないと思ったからだ。島の心霊スポットの話、島ではゲームソフトは買えないから PS3 ではソフトをダウンロードできるようになって困らなくなった話など日常の話をずっとしていた。

＜ちょうどいいまちづくり＞
海士町は住人のやる気と元気を自然に出させ、訪れる人にもストレートに幸せな気持ちにさせてくれるようなもので、理論を積み上げていったようなものではなかった。
まず住民一人一人の役割を感じられる町であった。島にはモノもサービスも都市のようにそろっていない。しかしその分、もの作りや保育、料理など色々な技術が求められていて、誰もが自分の得意なことを活かす場がある。島に I ターンした人も自分の存在価値を感じられストレスも無くなり、肌もキレイになったと言っていた。町の大きさや要素の量が１人の存在感が感じられる適正規模なのかもしれない。
また町の人々の人柄だけでなく、行政や studio- L の作った計画も本当に住民のためのものだった。海士町の総合振興計画はこの見学会で会った人は誰もが｢総振｣｢総振｣と自然に口にするほど浸透し、興味を持っていた。開けば分からない言葉がないよう沢山の注釈が下について、読みやすい色遣い。総振に限らず町のソフトやハードは、それを使う人がフル活用できるように行き届いたデザインがなされていた。
プランナーがおろそかにしがちな、１人１人に行き届いたデザインの大切さを痛感させられた見学会だった。
もう海士シックにかかってきたので、また行きたいと思う。

喜多　峻平

まず、このような見学会に参加させていただいた方々に感謝していると同時に、山内道雄　海士町長をはじめとした海士町すべての方々、studio-L の山崎さん、西上さんにも様々な事を教えていただき感謝をしています。

海士町見学会に申し込んでから、海士町という地名を知ったような状況で、あまりしっかり勉強できないままに今回の見学会に臨んでいる状況であった。そのような状況の自分にも海士町長・まちづくり課長等の分かりやすい説明と実際の海士町の人々とのふれあいから多少は海士町のことは理解できたかな・・・とは感じています。

そんな海士町で感じた点、気づいた点を述べたいと思う。

①海士の話をしている時にとても誇らしく話していたこと

ーこれはとても重要なことなのではないかと思う。どんなものが特産品で、あんな素敵な人がいて・・・等、まるで自分のことについて話すかのように話している姿は印象に残っている。こういった人びとが外に出て行った海士について話したら、誰だって行きたくなるだろうな・・・と

②誰でも受け入れるシステムがしっかりできていること

ー「いつでも入ってきて、いつでもいなくなってもいいよ」と誰かが言っていたのがとても印象に残っている。入ってきた人にプレッシャーをかけないこともまた、重要なのだな・・・と

③I ターンで住んでいる人もちゃんと海士人になっていたこと

ーBBQ の時に I ターン者の人と話していて感じたことである。しかし、I ターン者の「ちっぴーさん」が最後に言っていたことが印象に残っている。「海士人になり過ぎも良くない。ちゃんと客観性も持たなければ。」確かに「客観性」を持って住むことは I ターンで来ている人の重要な役割なのかもしれない。

まだまだ、書き足りない感はあるが、これは今の研究室の人、その他諸々の人々に話して行こうと思う。これは観光できた自分の役割の一つだと考えているからである。様々な事を感じ、体験できたとても良い経験になりました。

企画していただいた松宮さん・上ノ薗さんありがとうございました。

佐多　祐一

島で生きる。レジャーで１、２回しか島に行ったことのない自分にとって、それはすごく魅力的なようでもあり、一度生活に慣れてしまったら戻って来られないような、得体の知れない不安感も同時に抱いてしまう生き方。

今回初めて島で生活している方々と、ほんの短い間でも話す機会を得、その考えは今では古い考え方かもしれないと思わされました。日本の中でも特に現代的な現象の最先端を走っている場所だからこそ、鋭くアンテナを立て、強力な指導力で町を引っ張る町長さんを始めとした行政の人達や、新たな人生の目標のため、志高くやってくる人達がいる。しかもその人達が現実に島を変えつつある。ゆっくりではあるけれど､着実に変化している場所だということを感じました。しかし、もっと印象的だったのは、その一方で、ただ、なんとなく巡り合わせで来てしまった人達もいることです。一度も来たことがなかったけど、採用公募を見て応募したとか、電車の中の携帯で見つけて応募したとか、志とは程遠いような軽い気持ちで住み始めた人達が意外にもたくさんいて驚きました。もちろんずっと地元で暮らしてきた人との摩擦や、島という気質が合わなくて出て行く人もいるようですが、今回お話して頂いた方々は、皆満足して暮らしているように見えたし、不便に感じることもないと聞きました。実はこういう人達の気持ちこそ、現代の都市に住んでいる人が皆持っている気持ちのような気がします。一生暮らすかどうかを考えるとすごく重いけど、とりあえずぽんと来てしまう。来てみると、利便性や経済性のような価値観とは全然違った、豊かな価値観がある。都市に住む人々が満たされない部分を、補ってくれる場所として機能しているし、島でも来てくれる人を欲していて、需要と供給が今の時代に合っているような気がします。島という場所から連想されるような閉塞した場所ではなく、もう少し流動的な、緩やかな関係が形成されつつあるのかなと感じました。

たった二日間だけでは、表面のほんの一部しか体験することはできないと承知しながらも、新しい島での生き方、島との関係の結び方を見させてもらったような気がしています。今の自分では住むとは到底言えませんが、また来年も訪れたいなと思います。その時にはやっぱり旬真っ盛りの岩牡蠣が食べたいですね。

今回の見学会を企画、協力して頂いた皆様、本当にありがとうございました。

並木　義和

2010 年春、デザインに何ができるか？という挑戦的なタイトルでシンポジウムが開催された。そのときに話題にあがったのが海士町で、studio-L の山崎さんのお話に圧倒され、そのまま勢いで見学会に参加することになった。自分としては、まちづくりを色々な方面から頑張っている地域だという認識はあったものの、実際にどのようなことをしているのか、なぜ評価されているのかをほとんど知らなかったので、それを知ること、そしてこれまでに自分が見てきた地域との違いは一体何なのか、自分がこれからやるべきことは？といったことを考える機会と位置づけていた。

実際の見学会で行ったことというと、山内町長と役場の松前課長にお話を伺ったこと、竹の切り出しと BBQ で使うトングを作ったこと、I ターン者の方々との BBQ、翌日には町のはずれの集落にお邪魔したり海を見渡す展望台に連れて行ってもらい、最後には総合振興計画に関わられていた下野さんにお話を伺ったことなどである。話を伺うこと半分、体を動かしまちを感じること半分、といった感じだ。

こうした見学のなかで感じたり考えたこと、悩んだことは数知れずだが、まず最初に頭をひっくり返されるのは、これまでの過疎地域 (一般的に言われている表現をすると) は、決して遅れているのではなく、これから日本全国の人口が減っていく社会の先を行っているという考え方だった。そして、外の人を受け入れる土壌があり、何でも楽しくやってみようという意識がある。少しの滞在ではあったものの、これは色々と歩きまわってみて感じた印象だ。もちろんすべての人がそのような考えを持っているとは限らないが、他地域と明らかに異なる特徴だと思った。

人口が減ることが確実なこれからの地域がどのようにしてやっていくかということは、多くの地域において日々実践が行われているだろうが、大きな問題として、①仕事があるかどうか、②人口が増えるとして、これまで住んでいた人々と新たに入ってくる人、そして行政など様々な立場同士の関係をどのようにつくっていくか、の２つがあると思う。海士町では、①に関しては、仕事があるかどうかではなく、仕事は自分でつくるもの、あるいは、日頃から食べるものを自分でつくりながら日銭を稼ぐということがなされている。(I ターン者の人たちの心強いこと！) また、②に関しては、特に町長や studio-L によって、様々な角度や視点から、色々な地域への関わり方、参加の仕方が " デザイン " されている。地域へのアプローチとして、自分自身が地域に入って活動を繰り広げる視点や、デザイナー・プランナーの視点から一人の専門家として、多くの人が幸せな暮らしができるように地域へ参加する場をデザインする、といったことまで実に幅広いレベルの話に関わっていることが、これからの自分のあり方を考えるうえでは非常に面白いところだった。とともに、心にぐさっときたという感じも一方である。

海士町は確かにすごく面白いことをやっていて、学ぶことはたくさんあったのだが、一方で、基本的にまちづくり (とここでは表現するが) は各地域においての特殊解でしかなく、地域によって人を受け入れる土壌もまったく違うのだ、ということを思ってしまった。一方で、これからよりわかりにくいことをわかりやすくするという意味で、形に残らない仕事をどのようにして評価し、そして扱っていくかが難しくも面白そうだなぁと思った見学会だった。

ただ、このようなことをずっと悶々と思っていてもしょうがないわけで、だからこそ I ターン者の方々のはつらつとした活動や話には元気づけられるものが確かにあったと今では感じている。

楽しかったり悩んだりといった感じだったが、こうして海士町に来て色々な話を聴けたのも、studio-L の山崎さん、西上さん、そして幹事の松宮さん・上之薗くんのおかげです。ありがとうございました！

古川　日出雄

『海士ならではの笑顔の追求』。これは海士町の総合振興計画のサブタイトルだが、今回の見学会で感じたことはこの一言につきる。海士町で出会った人はみんな笑顔だった。そしてその笑顔は、行政職員の意識改革、住民のまちづくり活動が同時に彼らの自己実現や娯楽とつながっているということ、専門家がまちに関わりはじめたタイミングとその関わり方、これらが相俟ってこそのものであろう。

僕達は海士町で感じたことを他地域でどのように活かせるのかを考えなければならない。一泊二日という限られた時間で感じることができたのはほんの一部であることは十分わかっているが、そのなかでも『住民参加』という既にありふれてしまったまちづくりに対して、専門家として関わる際に絶対に欠いてはいけない視点は確実に感じることができた。それは住民参加のまちづくりがそのプロセスに住民を巻き込むだけに留まってはいけないということ。計画策定段階でワークショップを開き、住民の意見を計画に反映させる、それだけで終わってはいけないということである。小さなことでも良い、計画策定からいかに速やかに彼らがいかにまちづくりの場で活躍できる舞台を創れるか、彼らがいかに楽しめる企画をうちだすか、そしてその後のマネジメント体制をいかに定着させるか、そこまでの一連の活動を実現させることが、専門家としてまちづくりに関わる大きな意味であると思う。その方法は普遍化できるものでなくて、普遍化する必要も無い。海士町には海士町のやり方があった。海があり、緑があり、I ターンによる若い力がある。自治体の規模としても互いの活動が目に入るような規模で、顔を付き合わせたコミュニケーションもしやすい。このような好条件とまちの課題を上手くつきあわせた活動をうちだしたのだろう。その結果が海士町ならではの笑顔につながっている。当たり前のことかもしれないが、自治体の規模が大きくなればなるほど、計画段階での住民参加にとどまることが多いと感じるので重要なことを再確認できた。

最後に、２日間僕らのためにお時間を割いてくださった、山崎さん、西上さん、町長、松前課長、そして島民のみなさま、貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。いつか現場に出て、○○ならではの笑顔をみるために今はさまざまなまちづくりのあり方を学び、考え続けることとします。

増子　泰亮

今回、GSDｙの企画に初めて参加した。大学の授業で、海士町の総合振興計画を知り、別冊のイラストのかわいさに引っかかり、読んだのが興味を持ったきっかけである。「なぜI･Uターン者が多いのだろう？」、「人口が少ないから盛り上がってるんじゃないの？」そんな疑問を抱いている矢先の見学会であった。今回現地に行ってみて、感じたことをまとめたいと思う。

■島に溢れる魅力

今回、私は島という場所にフェリーにて初めて訪れた。本土から島に向かっていくにつれて変化する海の色には期待感をそそられた。島には、本土で見るのとはまた少し違った海や山々の風景があり、牡蠣を中心とした海産物や、塩、お茶、しゃもじといった商品、そして鎮竹林といった人々の活動も行われており、海士という地の魅力をさまざまな場所で感じることができた。

見学中、とある限界集落を訪れた。日中であったため、外にはあまり人がいなかったものの、川辺に布団が干されていたり、開放された民家が休憩所として使われていたりと、人の営みを微かに感じることのできる風景が垣間見えた。一般的な高さより低くつくられた民家の塀も、住民同士があいさつしている様子を連想させ、印象に残っている。限界集落を去る間際、ある一家の方々とお話することができた。そこには、人を迎え入れるような優しい笑顔があり、居心地のいい雰囲気があった。この島の人々の笑顔こそが、一番の魅力なのだろうと思う。都会にて子供のころからインターネットがあるのが当たり前の環境で育ってきた我々にとっては不便とも思えるこのまちで、住民は人々に笑顔で接し、たくさんのＩターン者がこのまちに集まる。これはどうしてなのか、小さな疑問がわいた。

■現代社会の閉塞感

Ｉターンの方々と触れあう機会があり、どうして海士町に来たのかを伺うことができた。大阪での仕事のつらさから仕事を辞め、偶然海士町を見つけてきたという。それを聞いて、先日姉から聞いた話を思い出した。都内の会社に勤める姉は、同じ仕事にかける人数を減らされた上に同時に効率もスピードも挙げることを要求され、非常につらく、会社を辞めたい気持ちになると言っていたのである。これとは話が違うのかもしれないが、今、企業で勤める人は閉塞感を感じる人も多く、海士町にあるような都会にはない人の温かさや、信頼、安心を求めているのかもしれない。海士町が島人としての幸福とは何かを考えたように、各地で一人ひとりが一度立ち止まって、本当に大切なものを考える余裕を生むことはできないか…と、何をどうしたらよいのか分からず、複雑な気持ちでいる。しかし、伺ったお話は、Ｉターン者の一部のお話であり、世代や地域によって全く異なる話でもあるため、改めてＩターン者の方々ともっとお話してみたいと思っている。

■「まず、できることから」

海士町の第４次総合振興計画では、島民にとっての幸福とは何かを探り、島民一人ひとりができることは何なのかというところまで落としこんでいる。さらに、鎮竹林のように一人ひとりができることを実際に行っているところが本当に素敵だと感じた。海士町では、地縁型のコミュニティがしっかりしており、我々の住んでいる都会とは全く違う条件にあるものの、自分の住んでいる地域に何か参考にできることはないだろうか。まだ答えは出ていないが、今回の見学で、今まで災害という観点からは必要だと思っていた地縁型コミュニティの重要さを改めて実感した。私の住む千葉県浦安市は東京のベットタウンであり、海士町とは人口も住む人の意識も環境も全く異なる場所であり、コミュニティにおける問題も全く違うわけだが、学生という立場から、「できること」を考え、実行していきたいと思わせてくれた見学会であった。

福角　朋香

４月に山崎さんのシンポジウムを聞き、住民の巻き込み方やワークショップの方法など驚くことがとても多く、現地の様子を見てみたいと思い、参加しました。

実際に行ってみて驚いたことがあります。それは海士町の目指す「自立」のかたちとその取り組みです。合併を拒否し、自分たちでなんとかやっていくという道を選んだ島。町長さんのまちに込めた想いと、それを信じてついていく役場の方々。そして一人一人の住民のしっかりした考え方と行動力。それらの強い意志と実践する行動力が、多くの人を惹き付けるまち－海士町のベースになっていることを知りました。

また、海士町の人たちは外から来た人（Ｉターン者や観光客など）に対する受け入れの姿勢がしっかりしているという話を聞きました。それだけではなく、「島に来た人が出て行くことを恐れない」ということも。単に引き留めるのではなく、海士町で感じたこと、体験したことを外に伝えてほしいのだと。そうしてまた海士町や海士町の取り組みが外へ広がっていき、海士町も成長していくと。素晴らしいと思いました。
島という土地柄、閉鎖性を余儀なくされる地域にも関わらず、外に対するオープンな姿勢を保つにはやはりそこには強い意志が必要なのだと感じました。

あふれる自然とともに生き、あるものの中で見つける贅沢な暮らし。一泊二日という短い時間でしたが、海士町の豊かな暮らしを体験できたことをとても嬉しく思います。
山崎さん、西上さんはじめ海士町の町長や松前課長、交流会でお世話になった方々に感謝致します。

松宮　かおる

＜人口減少を恐れるな！＞

　人口減少。この言葉を聞いて何を思い浮かべるだろうか？
錆びたアーケードに時代遅れの色あせたポスターの並ぶ商店街。
瓦は崩れ、窓ガラスの割れた空家。
最後の収穫はいつだったのだろうか？雑草の生い茂った田畑…。
　人口減少－それはその先に待ち受ける、ひとつのまちの死を想起させるもの。

　誰だって自分の死について考えたくない。自分が老いて、弱って、ひとり寂しく死んでいく、そんな将来には目をつむりたい。だから、自分はいつまでも若いと信じ、年不相応な格好で街を歩く。－あぁ、カッコ悪い。

　年を重ねるごとに、人は死に近づいていく。それは事実。嫌なものに対して目隠しをするのではなく、自分の死を受け入れることで、もっと充実した人生を送ることができるのではないだろうか。

　年を重ねるごとに、都市は死に近づいていく。とは限らない。しかしまちにおいても、死を恐れるあまり、今の自分を冷静に見つめることなく、過去の栄光にすがり、ただもがいているところがあるかもしれない。年不相応な抵抗は混乱を呼び、さらなる衰退を招く。

「2030 年、ほぼ全ての県で人口は減少する。そんな中、現在既に人口減少が進んでいる海士町は時代の最先端だ。」山崎さんのこの言葉からは、海士町は「人口減少」という死のイメージを受け入れ、生のイメージとして転換させてしまっている、そんな印象を受けた。
　また、町長さんのお話では、I ターン者が多く、戸数の多い集落よりも、戸数の少ない集落の方が、住民同士のつながりが強く、まとまりがあって安心ということだ。さらに西上さんのお話では、そのような小さな集落の中では、外出する時に家に鍵をかけると、近所の人に怒られてしまうという。というのも、外出中に宅配便が届いたとき、ご近所さんが代わりに荷物を受け取ることもできないし、突然雨が降ってきたとしても洗濯物をしまってあげることができないからだそうだ。「小さな集落だったら、そういうものなのかなぁ。」頭では理解したつもりだったが、あまり実感はわかなかった。

　見学会の２日目、島の集落をいくつか尋ねることができた。その中のひとつ、十数戸ほどしかない小さな集落を歩いていた時のこと、庭先でご近所さんたちと楽しそうにお話をしているおじいちゃんを発見！そしてその格好は、まるで家の中にいるような、ほぼ下着姿だった。「あぁ、この集落は、全体でひとつの家なんだ。ひとつひとつの住戸はそれぞれの部屋。そりゃぁ鍵もかけないよなぁ。」西上さんのお話を聞いたときは実感がわかなかったが、妙に納得した。

　テープのお見送りをしていただいた後、船から眺めた海士の島。山と海のわずかな隙間に点々と開けている小さな集落たち。ひとつひとつが大きな家に見えた。

　海士町では、人口減少に目をそらすことなく、自分たちの求める幸せとは一体何なのか、きちんと見つめ、海士ならではの笑顔を勝ち取っている。人口減少が問題ではない。減り方の問題なのだ。人口減少、恐るるに足らず！

　これからはどう人口を減らしていけばよいのか。自分は都市空間を専門とする立場から、一体何ができるのだろうか？今回の経験をもとに、今後も考えていきたいと思う。
　…しかし、ここで新たな壁が！―就職活動である。

＜仕事は後からついてくる！＞

　どうすれば人口減少を都市の生まれ変わるチャンスにできるのだろうか。どうすれば全ての人が安心して眠れる社会を築くことができるのだろうか…。世の中には解かなければならない課題が山ほどある。しかし、どれもなかなか現実の職業と結びついてはくれない。まわりの友達が公務員や、ゼネコンに就職していく中、自分はまだ社会人の仲間に入れずにいる。どこの仲間に加わればいいのかわからないまま、足踏み状態だ。

　都市では１年中同じ仕事を続けているのが一般的だが、海士町では、正規雇用は少なく、季節に合わせて職を変えるという。海士では自然相手の仕事が多いため、おのずとそうなるのだそうだ。また、自分の得意なこと、好きなことを続けていたら、人口の少ない海士では、それが重宝がられ、結果として仕事になるというケースもあるそうだ。

　世の中は常に変化している。その世の中で必要とされていることも常に変化しているはずである。その流れに、既存の職種がついていけているとは限らない。まず、どこかに納まるのではなく、自分がすべきだと信ずることに挑戦し、継続することである。それが世の中で本当に必要とされていることだったら、結果的に仕事へと繋がっていくだろう。仕事は後からついてくるのだ。
　ただ、その時にもし、「あなたの職業は？」と聞かれても、はっきりと職名を答えることはできないかもしれないが。

　ここで昔の CM の中で、神田うのが言っていた言葉を思い出す。「職業は、神田うのです。」この言葉を聞いたとき、「すごいな、この人。」と素直に思った。彼女はひとつの職におさまることなく、女優に、モデル、デザイナー、プロデューサー…と、様々な分野で自分の能力を存分に発揮している。それらの仕事をまとめる職名なんて存在しない。
　私も自分の能力を見極め、職種にこだわることなく社会に貢献していきたい。そしていつか、私にも言えるときが来るだろうか。
「職業は、松宮かおるです。」

八木　亮輔

こんにちは．GSD y のイベントや WS にはほとんど参加したことはないのですが，今回は時間の都合が付いたことと加藤くんの熱いお誘いにより有休を取りつつ参加した．
私は学生時代に東北地方でまちづくりを行っていたが，そこでの経験で幾多の悩みにぶち当たっていた．例えば，「どうやったら高齢化した町に若者を呼び戻すことができるのか？」や「どうやったら小さな町でも産業を興し，食っていくことができるのか？」など頭の中はぐるぐるぐるぐる．
そんな悩みを抱えながら，社会人になり，関東に住み始めた（現在は関西在住）．そんな中，加藤くんの熱いお誘いにより，４月に Studio-L の山崎氏と下條村の伊藤村長の講演を聞くことができた．「何，この人たち！ハンパねぇ！若者呼び戻しちゃったし，産業も興しとるやん！」とあのシンポジウムでの興奮は忘れることができなかった．もう，海士町に行かずにはいられない．今回は色々な方々に会うことができたので，その感想を少しずつ書いてみます．

① 町長と松前課長，つまりバカ者

この町は確実に成功への軌道に乗っているし，このまま行けば何の心配もない．松前課長の今までの活動を聞いてそう思った．しかし，町長への質問タイムで，誰かが「成功の一番の秘訣は何ですか」と質問した時に，町長は「まだ，成功だとは思っていない」と一言目でばっさり言いきったのは印象的であった．この気持ちが次から次へとアクションを起こすエネルギーになっているのだろう．55 歳から島へ帰っての挑戦．課長の努力．ハンパない．

② I ターンの若者

次に I ターンの若者たち．ここでの人たちは，学生時代にパッカーとして出会った旅行者たちと同じ雰囲気を持っている．彼らは海士町に沈没しているのだ．都市での仕事に疑問を感じ，一度，今着ている服を脱ぎ捨てて，海士町で心豊かに生活をしている旅人だ．旅人は,進む方向を自分で決める．自分で決めるからこそ，責任を持って生きている．小さな船に乗って彼らはゆらゆら櫂を漕ぎながら航海を楽しんでいるようだった．仕事と生活のバランスを舵取りしながら．彼らの船はハンパなく素敵だ．

③ Studio-L の西上氏，山崎氏，つまりよそ者

やっぱりプロはすごい．そう思うことが多い二日間でした．西上氏はまるで島中のみんなが友達のようでした．もちろんそこまでの葛藤や努力もあり，そのお話を聞けたのはプラスでした．感謝します．今は島に住んじゃって，島への愛はハンパない．そして，山崎氏．一番島を楽しんでいる．我々が海で泳いでいると，「気持ち良さそうだな～，僕も着替えないけど入っちゃおー.」と．取れたてのうにと岩ガキを頂くとすぐにつぶやく．仕事の楽しみ方，勉強になりました．ハンパないです．

山田　敬太

まずは、海士町の皆様、Studio-L 山崎さん西上さん、そして企画して頂いた松宮さん上ノ園さん、貴重な体験をさせて頂きありがとう御座いました。
2 日間ですっかり染まっていた島時間の感覚から数日ですっかり都市時間に引き戻されてしまっています。

海士町では生きている事、生活する事をシンプルに感じらた様な気がします。何よりも島の一人一人が、町の存続の為に共同体として同じ方向を向いている逞しさ。生活共同体としての町の為に自分一人一人のやるべき事がここまで明確化している事例はあまり見た事がなかったので新鮮でした。
そして、そこから生まれる人々の安心感や安定感。近年は日本全体的に将来に対する漠然とした不安感がある様に思います。都市部でも景気が悪いなんて話ばかり耳にするし、地方に行くと過疎だ限界集落だなど大多数の人が先行き不安を覚えています。しかし、海士町は今回我々が触れなかった現実的に厳しい問題などもあるのでしょうが、住民の皆さんの前向きで行動力のある様子を見るとこの先 10 年、20 年しっかりと生活が守られている想像が容易につきます。

海士町の住民の方とお話していて特に印象的だったのが老年、中年、若年がお互いに尊敬しあう関係を築いていたことです。老年は知恵を知る者、中年は管理する者、若年は労働力といった基本的な関係があり、それぞれが相互補完関係になっているという図が都会暮らしの自分としては驚かされるものでした。
現在のような状態になる以前の海士町の事は殆どわかりませんが、町の改革が町長や住民へと連鎖反応的に好転していた結果なのであろうと思います。

最後に、幸福論について。
「島の幸福論」のグラフにある様に、確かに私には海士町の人々は非常に幸福そうに映りました。
「末端から最先端へ」と仰っていましたが、地方都市でなく日本としてもこれからは今までの経済成長すなわち幸福という構図では立ち行かなくなっていることは火を見るより明らかです。
我々は日本の幸福論を真面目に考えなくてはいけない。
そんな時に今回の海士町の幸福のあり方も一つの先端事例となって我々に示唆するでしょう。
そう考えていると我々の暮らしの先行きも少し光明が見えるかなという気がしました。

と、何となく固い感想を書いてしまいましたが、今海士町を思い返すと、「竹割り楽しかった」「海が透き通っていた」「取れたての牡蠣とウニがとにかく美味しかった」「島の人たちが皆本当にいい人たちだった」。当たり前のような感想ですがそこに全てが詰まっているんであろうと思います。

from Lecturer

山崎　亮

studio-L 代表

Learning from AMA（海士から学ぶこと）

　建築や土木や都市計画やランドスケープを学ぶ、いわゆる「建設系」学生たちが海士町を視察先に選んだことは時代の気分を反映しているように感じる。海士町には有名建築家が設計した建築物があるわけでもないし、特別な工法を用いた珍しい橋梁があるわけでもない。それでも学生たちが海士町へ行ってみたいと思った理由は次のうちのいくつかだろう。

　まずはいよいよ「つくりまくる時代」が終わりそうだということ。つくる仕事はこれからも存在し続けるだろうけれど、これまでのようにつくりまくる時代ではなくなるだろう、ということを学生たちは感じ取っているのだろう。特に、東京や大阪ではなく地方都市でどれくらい建設系の仕事が減っていることか。つくるための論理をいくらこねくり回しても、地方が抱えている課題はほとんど解決できない。それを体験するのに島根県の離島である海士町を訪れるというのは賢明な判断である。

　つぎに、最近よく耳にする「住民参加」って何をどうやって進めることなんだろうという疑問が学生たちにあったということ。この具体的な方法については、建設系学生がなかなか学べないものである。都合のいい現場がそれほど転がっているわけではないためだ。その点、海士町は住民参加で町の最上位計画である総合計画を策定している。策定に関わった住民たちと交流することで、そのプロセスをじっくり追体験することができるという意味で、学生たちが海士町を視察先に選んだことは正解である。

　そして、上記２点にも関係するのだが、学生たちは将来の仕事や生活について、不安を抱えながらも真剣に考えようとしている。この変化の時代、大企業に就職したり公務員になったりすれば安泰だ、という高度経済成長期のような神話が続くわけないということは感覚的に理解している。とはいえ、それならどういう仕事や生活に可能性があるのかがいまひとつ見えない。そんな学生たちにとって、同年代の大学卒業者たちが続々と集まる海士町での仕事や暮らしは謎だらけなのだろう。海士町に I ターンする若者たちは次々と新しい仕事をつくりだしたり、これまでの離島暮らしとは違った暮らし方を発明したりしている。そんな I ターン者たちと直に交流し、島で暮らしたり働いたりすることの本音を聞きだすことは学生たちの将来に少なからぬ影響を与えることになるだろう。

　建設系の学生が海士町を視察しようと決めた理由は以上のようなものだと推察する。だから、それらをすべて体験するような視察プログラムを設定したつもりだ。さて、学生たちは何を感じ、何を持ち帰っただろうか。そしてどんな行動を起こすだろうか。彼らが次に続く建設系学生たちの未来に風穴を開けるような行動を起こすことを願っている。

西上　ありさ

studio-L

海士町のまちづくりをお手伝いするようになって 4 年目になりました。
この 4 年の間に 1000 人を超す大学生ら若者が来島しました。
有名大学の学生が多く、修士論文を書くため、地元学の実践の場として、離島振興策の
社会実験の場など海士町をフィールドに数々の提案がなされました。

しかし彼らのほどんどは、「島におじゃまするルール」を教えてもらうことなくこの島に
入ってきました。その結果､一部の住民は外から入ってくる若者は「マナーが悪い」「周囲に迷惑がかかる」
など、みなさんと同じような若者たちに対してあまりいい印象を持てなくなりました。

なので松宮さんをはじめ、みなさんには
・ドタキャンしないこと（ドタキャンした場合、視察の担当者が視察協力先に謝って歩かなければならないこと）
・視察協力先は、仕事の時間を割いてみんなの対応していることを認識すること
・あいさつ、後片付けはどこへいってもきちんとすること
を徹底してもらいました。

わたしもみなさんと同じように大学生のころ、あちこちの事例を見て歩きました。
そのとき山崎さんに教わったことですが、
『どの地方へ行っても同じですが､「おじゃましている」気持ちを常に忘れないこと』
これが何よりも大切なことだと教わりました。
それができれば、どの地域にいっても地元の人たちにいつでも歓迎されます。

地方の事例から得られるものは、たくさんあります。
地方の生活の一部を垣間見せてもらうことで、日本の未来を想像することができます。
そこからわかしたちは、日本の未来をどうすべきかについて考えることができるからです。

最後に、海士町まで足を運んでくれて、海士町の取り組みに興味を持ってくれてありがとうございました。

※順不同。敬称略。

海士町教育委員会　地域共育課　課長

松前　一孝

先日は遠路はるばるご来町いただきありがとうございました。また、せっかくお越しいただいたのにこれといったおもてなしも出来ず申し訳ありません。

さて、感想をということで依頼を受けましたが、正直短期間で皆様とゆっくり話す時間もなかったためコメントしづらいのですが、ひとつ言えることは皆さんの情熱を感じたということです。１泊２日というハードスケジュールを組んででも「海士を知ろう」という意気込みはすごいと思いました。（発端は山崎さんの話を聞いてその気になったということなので、改めて山崎さんはすごい人だなと思いました。）

しかも皆さんは建築のデザイン専攻なのに、“ まちづくり ” やソフト面を学ぶという姿勢は、大きな視野で物事を考えられることができるので、将来きっと世の中のニーズに応えられる設計士やコンサルタントになることと思います。またそうなってほしいと願っています。

ただ今回少し残念だったのが、皆さん全員と話しする時間もなく、顔と名前も一致しなかったため、初めに自己紹介や名札があれば良かったかなと思います。しかし、限られた時間でしたのでいたしかたなかったかもしれません。

そういう意味では今度またゆっくりご来町いただき、話しできればと思っています。

また会える日を楽しみにしています。

兵馬　稚比呂

海士町教育委員会

ようこそ！海士へござらした！

ＧＳＤｙの皆様と過ごした時間はわずかでしたが、同じ世代の方々とこうして海士町をフィールドに共に時間を過ごせたこと、感謝しております。私も海士の「おもてなし」に憧れてこの４月に移住してきたので、少しでも海士町を楽しんでいただけておれば、いよいよ私も「海士人」の仲間入りができたのかなぁと喜びがあります。

私は学部生時代には、生涯学習を通じて、地域教育・社会教育を学んできました。ＧＳＤｙの皆様の活動と直接的な接点は少ないですが、「まちづくり」というキーワードを中心に意見交換をすることができ、新たな視点を得ることができました。「まちづくり」というものは、言葉どおり、人の営みの上に作りあげているものであるのだなぁと感じました。成果として上がるものにそれぞれの違いはあるものの、『まちをよくしていきたい』という気持ちが一致することに、心地よさを覚えました。

また、海士町で大事にしている「よそ者・若者・ばか者」の観点を、皆様と交流することで、回復？できたように思います。客観的な視点が地域に新しい風を送り込む、という町民の考えがあるからこそ、これまでの５年間で２５０名以上のＩターンを受け入れてきた実績があります。その一方で、海士町生活５ヶ月目に入り、ここの文化や習慣に馴染んでいく自分がおり、客観的な目を失っていることに戸惑いを感じてもおりました。ここでの文化をうまく吸収することを、必死に心がけていた５ヶ月だったので、皆様との出会いは、これまで生活していた東京の空気を感じ、自分の文化や習慣も大切にしようというある種の開き直りを得ることができました。東京にいた私も、ここにいる私も、どこにいても、自分らしくあることに幸せを感じます。海士町に貢献するためにも、「よそ者・若者・ばか者」の意識が自分自身で再確認できた事が、今回の何よりもの収穫でした。

皆様とは、わずかな時間で、深くお話する時間があまりありませんでしたが、また、いつの日か、どこかでお会いできることを楽しみにしております。もちろん、また、海士町にお越しいただければと想います。そのときには、今回できなかった体験を一緒にしましょう！いつでも「海士へござらっしゃい！」という、気持ちでこの島より、皆様のご活躍を期待しております。

5. Financial Report

収入※1	
GSDy 援助	76,600 円

支出	単価	数量		小計	備考
講師謝礼金（山崎さん）	10,000 円	x 1	=	10,000 円	
講師謝礼金（西上さん）	20,000 円	x 1	=	20,000 円	
講師交通費（山崎さん）	25,160 円	x 1	=	25,160 円	
講師宿泊費（山崎さん）	7,350 円	x 1	=	7,350 円	但馬屋にご宿泊されました。
おみやげ代				2,835 円	講師の方にお渡ししました。
報告書紙 (A3 用紙）代	2,850 円	x 1	=	2,850 円	
報告書紙 (A4 用紙）代	1,390 円	x 2	=	2,780 円	
封筒代	126 円	x 2	=	252 円	報告書の梱包として使用しました。
レターパッド代	150 円	x 1	=	150 円	報告書送付のご案内に使用しました。
報告書製本代	400 円	x 9	=	3,600 円	
報告書郵送費				1,570 円	講師の方 , お世話になった海士町の方にお送りしました。
合計				76,547 円	

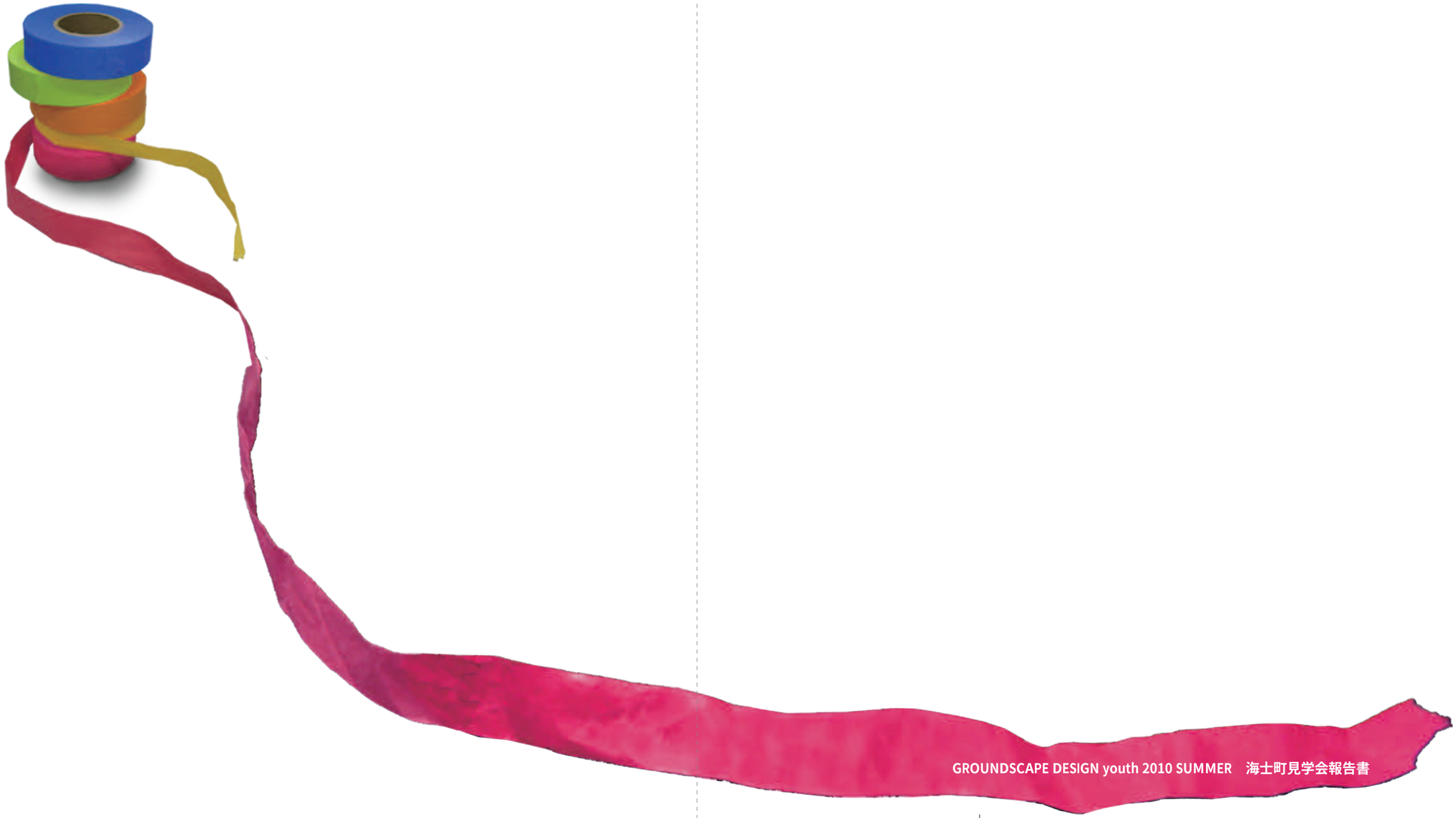
残金※2	53 円

※1 今回の見学会では参加費を集めず、参加者各自に交通費、宿泊費および食費をお支払いいただきました。
BBQ 時の参加者の飲み物代は、松前さんにご負担いただきました。どうもありがとうございました。
※2 残金は海士町の集落の方へお送りする写真の印刷費に使いました。

今回の見学会は、studio-L の山崎さん、西上さんをはじめ、海士町長の山内さん、海士町教育委員会の松前さん、総合振興計画環境チームの下野さん、産業チームの鎮竹林のみなさま、I ターンの若者のみなさまなど、多くの方のご協力を得て、実現することができました。本当にありがとうございました。みなさまのあたたかいおもてなしに、私たちはすっかり海士町のとりこです。

今年の春のシンポジウムからはじまった海士町と GSDy のつながりが、今後も途切れることなく続いていくことを願っております。

松宮 かおる



GROUNDSCAPE DESIGN youth 2010 SUMMER　海士町見学会報告書

2010 年 12 月発行
編著者：松宮　かおる , 上ノ薗　正人
写真提供：飯沼　伸二郎 p5(14)~(16),(18)~(20),p6(1)(3),p7(6)(12),p11(12),p19,p25,p28
上ノ薗　正人 p10(2)(10)
大谷　友香 p5(7)(12)(17),p7(17),p9(18)(19),p11(3)(7)(11)
並木　義和 p11(5),p23
福角　朋香 p5(6)(10)(13),p7(7)(15),p8(6),p9(9),p11(13),p18
古川　日出雄 p5(8),p9(5),p11(14),p15(下),p16,p24,p29
八木　亮輔 p9(8),p21
※以上に特記の無いものは松宮撮影。

GROUNDSCAPE DESIGN
youth